



上村敏之

社会経済システム学科講師  
専門は財政学、公共経済学。

大人数授業のコミュニケーション不足、授業で伝え切れなかったことをHPで補いたかったという上村先生。

## マクロ経済A/B

マクロ経済学は経済学を学ぶ学生にとって最初の難関とされる。計算問題など数学的要素が多く、文科系学生の中には苦手意識を持つ学生が少なくないからだ。

上村先生は大講義授業の進め方を合理化するとともに、受講生の理解を深めるため、インターネットのホームページ（HP）をフルに活用している。

HP『上村敏之の研究室』（<http://www2.toyo.ac.jp/~nemura/>）では自己紹介、研究業績のほか、講義ノートも公開している。受講生はIDとパスワードを入力して『マクロ経済』の部屋に進み、そこから講義ノートをダウンロードして授業に臨む。ワード形式で自由に編集でき、予習にもなる。講義前に蛍光ペンできれいにポイント分けしている学生もいる。

「板書の手間が省け、学生が講義に集中できます。講義の速度も上がりました」と上村

先生は語る。配布するプリントが余ってしまふ無駄もなくなった。ただしグラフなどの作図については講義中に板書で説明する。「手を動かしてノートに図を書き上げていくことで理解が深まりますからね」。

年に数回行われる小テストでは、解答・問題別の正答率・成績分布を細かに公開している。学生はこれによって自己採点が可能となり、自分の理解度を客観的に知ることができ。また、問題別に正答率を出すことで、学生の弱点がわかり、後の授業でフォローすることができ。正答率の低い問題についてはその後のテストで重点的に出題します」と語る。

また、上村ゼミでは毎年卒論もHPで公開。後輩のゼミ生がHPから自由に閲覧できるようにした。「こうすることで年々レベルアップすることを期待しています」と上村先生。卒業しても後輩に読まれる、という先輩ゼミ生のプレッシャーは相当なものだろう。

1972年生まれ。ネルシャツにジーンズといったラフな格好で授業する時は、学生の中に紛れ込んでどこにいるのかわからなくなるほどだ。学生時代はギターが趣味でハードロックに傾倒した。「当時では珍しく、かなりの茶髪にしてみましたから、まともなバイトができなくて。でも、学生には「バイトなんかするな」と言っています。所詮バイトは正社員3分の1以下の賃金で都合よく働かせられるだけ。それよりせつかつく4年間の自由な時間を使ってアジアあたりのディープな地域を放浪してこいってね」。何についてでも、「先生だからこうあるべき」という感覚はありません」と元ロック青年は笑った。

## ウォッチング

### 相撲部

相撲部がいま、勢いに乗っている。11月に行われた全国学生相撲選手権での大活躍は今号の『ニュース&インフォメーション』でご紹介したとおり。大会で活躍した主将の横山英希君（法律4年）、中野一成君（法律3年）、北園基嗣君（法律1年）に話を聞いた。

格闘技系の部活といえば、上下関係に厳しく、1年生が上級生に口をきくのは畏れ多い云々、張り詰めた空気を想像していたのだが、3人の和やかな雰囲気がいささか拍子抜け。1年生の北園君が何かいえば先輩2人が茶々を入れるといった具合。和気あいあいとした雰囲気の中で、インタビューは進められた。

こうしたムードは上下関係をなくし、

下級生が萎縮することなく、皆で力を伸ばしていこうとする考えから生まれた。部員20名は白山キャンパスに隣接する合宿所で寝起きしているが、部屋は2人から4人までの相部屋で、学年はバラバラ。これが部員の親交を深めるのにひと役買っているようだ。

相撲を始めたのが高校1年からという横山君に対し、小学校から始め、強豪校出身という後輩2人は、「もちろん礼儀はわきまえますが、私生活では上下関係は全然厳しくないですよ。ほかの大学ではもっとビシビシやってるみたいですが」と口を揃える。

オフシーズンの現在、練習は土俵を使って毎日夕方から1時間半ほど。しかし、試合前は熱気を帯びてその何倍にもなる。

相撲部の強さの秘密は？3人に尋ねると、「素質でしょう！」と高らかに笑った。彼らがいうと嫌味に聞こえないから不思議だ。事実、相撲部には毎年素質のある新入部員が入ってくる。北園君が入部してきたとき、中野君は、

「こいつには負けられない」と奮起したという。「活きのいい新入生」が上級生にはいい刺激となってますます練習に励む...という好循環を生んでいるのだ。

来年は最高学年として部を引っ張っていくことになる中野君に今後の抱負を尋ねると、「自然体でいきます」ときっぱり。「来年の相撲部も強いですよ。国体の優勝経験者が入部してきますからね」。相撲部の今後が楽しみだ。

第80回全国学生相撲選手権（両国国技館）

